慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディオニュソスとスサノヲ : 西脇順三郎と折口信夫
Sub Title	Dionysus and Susanoo : Junzaburo Nishiwaki and Shinobu Orikuchi
Author	安藤, 礼二(Ando, Reiji)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2013
Jtitle	Booklet Vol.21, (2013.) ,p.26- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Junzaburo Nishiwaki as illuminant 2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000021-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディオニュソスとスサノヲ
——西脇順三郎と折口信夫

安藤　礼二

研究者にして表現者

折口信夫は、西脇順三郎の博士学位請求論文である『古代文学序説』の副査を担当した[★1]。民俗学者にして国文学者、さらには釈迢空という筆名で短歌、詩、小説、戯曲、批評とジャンルを横断して執筆活動を続けた折口信夫（1887-1953）と、英文学者にして言語学者、さらには「超現実主義」の詩学を唱えそれを文字通り実践していった詩人である西脇順三郎（1894-1982）と。折口がやや年長ではあるが、ほぼ同世代に生まれ、研究者であると同時に表現者でもあった二人は、このとき（1949年）、ともに慶應義塾大学の教授を務める同僚であった。二人の邂逅は、まったくの偶然である。しかし、おそらくは近代日本文学史上の、あるいは世界文学史上の、必然でもあった。近代を条件とし、なおかつ近代を乗り越えていこうとする表現が、この二人によって、日本語というマイナーな言語の世界ではじめて十全なかたちで可能になったのだ。世界の諸地域が相互に密接な関係をもった巨大な一つの球（グローブ）として実現されつつある今、マイナーであることこそがメジャーを揺り動かす。

英文学と国文学という専攻分野の差異を超えて、西脇も折口も「古代」に心惹かれ、古代を「言語」の学として探究すると同時に、その成果をもとにして日本語による前人未踏の詩的表現の世界を切り拓いていった。近代にふさわしい新たな表現は、古代に遡ることによってはじめて可能になる。この場合、古代とは単なる時間的な過去だけを意味しているのではない。「原型」としての人間たちが生活していた世界、森羅万象と人間たちが「神秘」の絆で結ばれていた現在とは時間的にも空間的にも隔絶した野生の世界、あるいはニーチェやマラルメが夢想した人間以前にして人間以降の世界を意味していた。イエイツ、パウンド、エリオット、ジョイスらモダニストたち、あるいはブルトン、バタイユ、アルトーらシュルレアリストたちと西脇および折口は完全な同時代人であり、表現の主題を共有していた。互いに呼応し、交響し合う西脇と折口の営為を比較検討すること

によって、これまでとはまったく異なったかたちで、世界文学史としての近代日本文学史を書き替えることが可能になるはずである。本稿は、拙いながらもその素描としての役割を果たすことを意図している。

西脇も折口も、ともにジェイムズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』から甚大な影響を受け、文字として記録された最も古い資料の読解から、フォークロアの助けを借りて、さらなる始原へと遡っていこうとした。二人の学としての代表作が、それぞれ『古代文学序説』（西脇）および『古代研究』（折口）と題されているのは偶然ではない。西脇も折口も古代の祭祀に「詩」の発生を見るとともに、その発生状態にある瑞々しい「詩」を自身の表現として生きようとした。西脇の第一詩集『Ambarvalia』と折口の第一歌集『海やまのあひだ』は、その核となる部分に死と再生の儀式、豊饒をもたらすための祝祭が秘められていた★2。古語を復活させ、翻訳を大胆に取り入れ、古代世界と近代世界を、互いに矛盾するがまま一つに重なり合わせる独創的な詩法を、それぞれ『超現実主義詩論』（西脇）および「詩語としての日本語」（折口）としてまとめ、実践していったのだ。そして、『古代文学序説』と『古代研究』の成果をもとにして、ほぼ同時期に、二人にとっての言語表現の極北と断言してもかまわない定義不可能な作品、『旅人かへらず』（1947年）と『死者の書』（1943年）を刊行した★3。

西脇順三郎も折口信夫も自らの創造の源泉を「古代」に求めた。その「古代」に見出された、それぞれの自画像とでも称すべき存在もまた、お互いの鏡像でありかつ分身であるような、相互に正反対の側面をもちながらも良く似たものであった。西脇が最初にまとめた詩集である『Ambarvalia』（1933年）に描き出されたディオニュソスと、折口が最後にまとめた詩集である『近代悲傷集』（1952年）に描き出されたスサノヲと。両者の詩作を代表する二冊の詩集のみならず、西脇にとってディオニュソスは学の根幹にして「詩」そのものの化身だった。折口にとってのスサノヲも、また。

ディオニュソスとスサノヲ

西脇順三郎は、『Ambarvalia』の「古代世界」を構成し、詩集全体の象徴ともいえる著名な作品、「皿」のなかで、異郷へと向かって旅を続ける自身の姿を、古代の異神にして放浪神たるディオニュソスになぞらえていた★4——。

黄色い菫が咲く頃の昔、
海豚は天にも海にも頭をもたげ、
尖つた船に花が飾られ
ディオニソスは夢みつゝ航海する
模様のある皿の中で顔を洗つて
宝石商人と一緒に地中海を渡つた
その少年の名は忘れられた。

麗(ウララカ)な忘却の朝

海を朗らかに行く西脇のディオニュソスに対して、やはり海の只中に追放された折口のスサノヲは悲痛な叫び声を上げる。これもまた古代の異神にして放浪神であるスサノヲを主題とした「贖罪」と題された折口の詩は、こうはじまっていた――。

すさのを我　こゝに生まれて
はじめて　人と生まれて－
ひとり子と　生(オ)ひ成(ナ)りにけり。
　ちゝのみの　父のひとり子－
　　ひとりのみあるが、すべなさ

戦争によってすべてを失った折口は、短歌という定型の表現に安住することができず、「現実の生活が、私の腹から、胸から、私をつきあげるほどに、迫つて」くる衝動にしたがい、詩という不定型の表現へと果敢に向かっていく★5。大学時代から探究していた日本の真の神、神と獣の性質を兼ね備えた「神獣一如」の万葉人の原型として存在した折口のスサノヲは、このとき、新たな「詩」の主題としてその姿を現したのである。天上の父なる神から、母親の胎内を経ることなく誕生したスサノヲは、それ故、常世という他界へと去った母親を激しく求め、泣き叫び、世界に破滅をもたらすような力を解放する――。

我が力　物をほろぼす－
憤恚(イキドホロ)し　我が活(イ)き力(ヂカラ)
　わが父や　我を遁(ノガ)ろへ、
　我や　わが父に憎まえ
　　追放(ヤラ)はれぬ。海(ワタ)のたゞ中

光のディオニュソスと闇のスサノヲ、創造のディオニュソスと破壊のスサノヲ。両者はきわめて対照的である。しかしながら、ディオニュソスもスサノヲも荒々しい暴力を解き放つと同時に舞踏と詩という芸術をもたらす神であり、その結果として定住ではなく放浪を運命づけられ、最終的には生と死をつかさどる冥界の主へと転生する神であった。西脇の学も折口の学も、あるいは西脇の表現も折口の表現も、人間を乗り越え「神」を直接の主題とする。いわば、人間以前の学と表現であり、人間以降の学と表現であった。ニーチェとマラルメの営為を、時代と国境を超え、直接に引き継ぐような……。しかも二人が見出した古代人は「神」へと至る通路をもっていた。祭儀を通じて、つまり祝祭のなかで死と再生を経験することによって、人間は限りなく「神」に近づくことができた。

『古代文学序説』の執筆の過程で、荒々しくも高貴な古代の野生人、ゲルマンの民らの死と破滅へと向かう悲劇的かつ凄絶な生の在り方を自身の言葉で再構築していくことで、西脇のディオニュソスは、折口のスサノヲがもつ性格をも兼ね備えていった。西脇は「武勇の倫理」を生きた古代人のなかにも、「愛の倫理」を生きた中世人のなかにも、光と闇、生と死、悲劇と喜劇といった相反する二つの力を共存させる、人間の原型としてディオニュソスを見出す。古代人も中世人も祭儀を通じて「神」と相まみえる。あらゆるものを争闘として捉え、死を生へと転換させる供犠を行う古代人を論じながら、西脇はこう記す――「二つの相反する要素が共存してゐる一つの存在は絶対の存在である。これは神の存在である。ギリシアのディオニソスの神は生死二重の性質をもつ存在である」。

さらには、厳粛である死の儀式、あるいは収穫を言祝ぐ豊饒の祭りの只中に「下等な卑猥な言語や身振をもつて表はす」笑いをもたらす中世人を論じながら、こう記していた――「ギリシア人の間では悲劇も喜劇もその元は同時に発生し、また同一の祭りの中に使用された。ディオニュソスの神の信仰は同時に悲劇と喜劇の根元であつた。この神はその死と復活とが信仰されてゐた」。荒ぶる古代人も、笑う中世人も、西脇にとっては、ディオニュソスとともにあったのだ。さらに西脇は、時間と空間の差異を超えて存在する原型としてのディオニュソスを、『古代文学序説』が書物として刊行されるにあたって最後に書き加えられた序論と結語のなかで、「幻影の人」と名づけた。『古代文学序説』という書物全体を通して、ディオニュソスは「幻影の人」へと変容し、西脇の学と表現を通底させる一つの原理となっていったのである。

西脇は「幻影の人」を、こう定義する。まずは序論のなかで――「幻影の人」とは「原始的な人間の一つのタイプであり、最古の人間の姿である」。つまり「生命の根元とも真の人間の姿とも、土の幻影とも考へられ」、「永遠に人間の中にかくれて残る生命の神秘」をあらわす理念であった。さらには結語において――。

> すべては変化して遂に破滅する。人生はすべて運命によつてのみ決せらるる悲劇である。
> 人生は放浪の旅である。人間は放浪者である。
> 人生の本質は争闘と苦しみである。人間は争闘のために生き、苦しみのために生きてゐるのである。
> 神は人間にこの争闘と苦しみを与へる。
> 人生それ自身は神に対する供犠である。

西脇がここに抽出した「幻影の人」のもつ性格は、折口が述べるスサノヲとほとんど等しいものだ。折口はスサノヲの生を「贖罪」と名づけた。天上の父から「争闘と苦しみ」を与えられ、故郷を追放され、母を求めて

泣き叫ぶスサノヲ。『古代文学序説』に描き出された西脇の「原始人」もまた、折口のスサノヲのように純粋な感情を爆発させ、そこに始原の詩を生み落とすのである――「原始人は哀愁の情を好む。哀愁の中に生命の神秘を発見するのである。非常な淋しがりやである」、また「『男泣き』は英雄物語にも普通のことである。感傷的なものである」。西脇の「原始人」、つまり「幻影の人」にとって、哀愁こそが「もの」の存在の根源であり、そこから神秘としての「詩」が生まれてくる。

折口が最後にまとめた詩集である『近代悲傷集』の全体にスサノヲのモチーフが貫かれていたように、西脇の「幻影の人」もまた、時空を越える旅へと「超自然主義」が昇華された『Ambarvalia』に続く第二詩集、やはり旅が主題となった『旅人かへらず』全体を貫く重要なモチーフとなった。博士論文『古代文学序説』と詩集『旅人かへらず』は、「幻影の人」を媒介として相互に密接な関係をもっていた。『古代文学序説』の序論と結語を受けるようなかたちで、あるいは実際にはその関係は逆であったかもしれないが、西脇は『旅人かへらず』の冒頭に「幻影の人と女」と題した「はしがき」を付す。

西脇は宣言する。自分のなかには、近代人と原始人という相反する二つの人間の類型が潜んでいる。しかし、それだけではない。原始人以前の人間、つまり原始や近代といった限定を超えた「生命の神秘、宇宙永劫の神秘に属するもの」、近代の理知だけでも原始の情念だけでも十全には理解されないような人間の類型が潜んでいる。自分はそれを「幻影の人」と名づけ、また「永劫の旅人」とも考える。

西脇は続ける。さらに、その「幻影の人」とは、男と女という生命における原初の対立さえも乗り越えてしまうものなのだ――。

> 次に自分の中にある自然界の方面では女と男の人間がゐる。自然界としての人間の存在の目的は人間の種の存続である。随つてめしべは女であり、種を育てる果実も女であるから、この意味で人間の自然界では女が中心であるべきである。男は単にをしべであり、蜂であり、恋風にすぎない。この意味での女は「幻影の人」に男よりも近い関係を示してゐる。

西脇は、自ら「女」へと変身し、一人の「女」として『旅人かへらず』という一冊の詩集を書き上げたのだ。西脇がこの「はしがき」で宣言した「女」になること、あるいは「女」になることではじめて詩を生み出すことが可能になるという見解の根底には、ニーチェの超人思想への異議申し立てがある――「これ等の説は『超人』や『女の機関説』に正反対のものとなる」。しかし、それだけではない。「超人」への否定的な側面だけではなく、「超人」を乗り越えていくような、より肯定的な側面も存在する。その肯定的な側面を明らかにしてくれるのが、折口の没後、西脇が書き続

け、語り続けた折口の営為への共感であろう★6。

西脇も折口も、男性という限定された性を乗り越え、両性を具有した根源的な「女」になることではじめて「詩」を生み出すことができると考えていた。「古代」が生と死という対立を超え出た場であったように、西脇と折口が主張する「女」もまた、おそらくは男と女という対立を超え出た場を意味する。詩が生み落とされる「女」という場は、限りのない懐かしさとともにつねに薄気味の悪さをたたえていた。不気味なものにこそ「故郷」が宿る。ちょうどスサノヲがそこに還ることを望んだ「妣が国」が同時に死者たちの国であったように。折口にとって、「母」はつねに死者たちの側にあった。表現が生まれ出てくる根源的な場所、「妣が国」へと到り着くためには、自身もまた、豊饒と破滅、生と死をつかさどる両義的な存在へと変身しなければならないのだ。

西脇は、折口の学と表現の両者に通じ合う「ぶきみさ」について、こう語っていた（「釈迢空」より）——

> 迢空の国文学や民俗学の解説も作品も、私の考えでは、原始宗教の神がかりの巫女の霊感に近いものであろう。そして私のいう詩境の神秘というのは、このことを言いたいのである。そういうように空想してみると、なんとなく迢空の声も女らしくきこえるし、またその歩きかたも、その身ごなしも女性らしい印象を与えるように感じられる。そしてなんとなく、ぶきみな巫女の妖怪さが人に神秘を感じさせる。

西脇は、ここで折口のことを語るとともに、間違いなく自分自身のことを語っている。詩の根源に到達するためには、ディオニュソスもスサノヲもともに「女」に、あるいは性別を超え、生死を超え、生産と破壊を同時につかさどる大地母神のような存在へと変身しなければならなかった。その詩の女神への変身を可能にするのが祝祭（祭祀）なのである。西脇は、折口学の本質について、さらにこう述べていた。折口の「発想」のすべては、「祭祀としての現象を中心に」なされた。「古代の日本文学の研究には日本の祭祀学がなければ完全な科学研究にはなりえない」、その点を明らかにしたことに「折口学の今までにない貢献がある」と（「日本の民俗学」より）。

人間以上のもの、つまり両性具有の詩の「神」への変身を可能にする祝祭（祭祀）はローカルなものであるとともにグローバルなものであった。固有性を突き詰めたところに普遍性があらわれる。西脇が、折口からの教えとして何度も反芻する見解である。座談会「三田の折口信夫」のなかで西脇が回想する、折口が「古代」について語った真実とは、次のようなものだった——「日本だけ特別なものがあったて、そんなのは意味がないんだと。これは世界中、どこの民族でも古代は一定の原則があるんで、彼はそう言いませんけど私の言葉で言うとね、だから世界に共通してあるもの

は日本にある、それが価値がある、日本だけにあるということは、それは価値がないんだとこう言ったんですよ、はっきり」。

西脇順三郎と折口信夫が出会う「古代」とは、時間と場所に限定された固有性を超え、人間にとっての普遍性がひらかれる場所だった。つまり、二人にとって「古代」を外側から研究するだけでは充分ではなかった。「古代」とは、なによりも内側から詩的表現として生きられなければならなかった。だから西脇はディオニュソスであるとともに「幻影の人」となり、折口はスサノヲであるとともに曼陀羅を織り上げる「少女」になったのである。折口が生涯で唯一完成することができた小説――というよりはさまざまな音と色彩の交響からなる散文詩――『死者の書』は、荒ぶる死者を復活させる少女の物語だった。少女は蓮の花から糸を紡ぎ、巨大な曼陀羅を織る。その曼陀羅に包み込まれ、その曼陀羅のなかで、干からび強張った死者の身体は、瑞々しい「光」の身体へと変成される。

しかも折口が『死者の書』のカバーに採用したのは、エジプトの『死者の書』に由来する、冥界の王オシリスによる魂の復活を描いた図版だった。肢体をばらばらに切断されて殺された兄オシリスは、妹にして地母神でもあるイシスの力によって甦り、冥界の死者たちを支配する王となる。オシリスはスサノヲと等しい存在であり、西脇も折口も大きな影響を受けたフレイザーの『金枝篇』では、自らを供犠として復活する神としてディオニュソスとともに論じられていた。スサノヲはオシリスを媒介としてディオニュソスと重なり合い、『死者の書』は『金枝篇』を媒介として『旅人かへらず』に重なり合う。ローカルな祭儀と神話が、グローバルな祭儀と神話とダイレクトに結び合わされていたのである。折口は、スサノヲ（オシリス）であり、大地母神（イシス）であったのだ。

西脇順三郎は『旅人かへらず』で、「幻影の人」に永劫の時間と永劫の空間が一点で交わる「曼陀羅の里」を歩ませる。そして、『旅人かへらず』の最後の節（168）はこう閉じられていた――。

永劫の根に触れ
心の鶉の鳴く
野ばらの乱れ咲く野末
砧の音のする村
樵路の横ぎる里
白壁のくづるる町を過ぎ
路傍の寺に立寄り
曼陀羅の織物を拝み
枯れ枝の山のくづれを越え
水茎の長く映る渡しをわたり
草の実のさがる藪を通り
幻影の人は去る

永劫の旅人は帰らず

この一節こそ、巫女の文学としてイシスによる復活の業を描き尽くした折口の『死者の書』への、西脇なりの返答、西脇なりのオマージュであったように思われてならない。表現の「古代」によって、西脇順三郎の『旅人かへらず』と折口信夫の『死者の書』は一つに結ばれ合っていたのだ。そして、その表現の「古代」から、西脇も折口も、日本語による未来の詩、日本語による未知なる詩を立ち上げようとした。それは西脇と折口の生と表現を超えて、時間と空間の差異が一元化され、さまざまな文化が入り混じる表現の「現在」を生きるわれわれ自身の問題でもあった。

未知なる詩の姿を求めて

あらゆるものの対立を無化し、あらゆるものを一つに結び合わせるディオニュソスは、西脇順三郎が『超現実主義詩論』で論じ尽くした「超自然主義」の詩法の核心にも存在していた。西脇は、こう書きつけている。「超自然主義はデオニソスの芸術に属する。ギリシアの最も優秀なるポエジイと共に」。さらには「嬉しい時にオドルことは自然主義である。悲しい時に限りオドルことは超自然でありより超自然的芸術価値を生ず」とも（「超自然主義」の第三章の冒頭より）。西脇にとって、「超自然主義」の詩は、ディオニュソスの祝祭とともにあった。

西脇は「超自然主義」の詩を、こう定義していく。日常の経験の世界を打ち破り、非日常の永遠の世界を今ここに実現すること。そのためには「科学的に性質を異にするものを結びつけ」、また「時間的にも空間的にも最も遠くはなれたるものを結びつける」必要がある（いずれも『超現実主義詩論』の巻頭に収められた「PROFANUS」より）。常識ではとうてい不可能な連想が、想像力によって可能になったとき、超自然の詩が孕まれる。だから、詩の創造はその破壊と見分けがつかない。相反するイメージとイメージが、あるいは心と物、人間と自然、古代と現代、悲劇と喜劇が、一つに結ばれ合ったとき、新たな詩が生まれる★7。西脇は「超自然主義」の詩が果たす役割を、次のようにまとめていた（同じく「PROFANUS」より）——。

> 詩は故に、意識する一つの方法である。現実を非現実に変形し、真理を非真理に変形して、現実、真理を魂の中に吸入するのが詩である。外形からみると詩は非現実で非真理であるが、実は現実、真理を認識するのである。

「超自然主義」の詩は現実と虚構の境界を無化し、詩のなかに虚構が現実となり現実が虚構となる「超現実」の領野をひらく。西脇が詩の問題として実践していった「超自然主義」の詩法を、短歌として実現したのが折口信夫だった。さまざまな時間と空間の境界を越え、それらを一つに結

び合わせる「旅」を主題としてまとめ上げられた第一歌集、『海やまのあひだ』に収録された折口の短歌こそ、まさに「超自然主義」の短歌と名づけることがふさわしい。特に大正10年の章に収録された13首からなる「夜」という連作において。「夜」の連作には、一連の歌が読まれた背景を説明する詞書が付されていた――「下伊那の奥、矢矧川の峡野（カフチ）に、海（ウミ）と言ふ在所がある。家三軒、皆、県道に向いて居る。中に、一人の翁がある。何時頃からか狂ひ出して、夜でも昼でも、河原に出てゐる。色々の形の石を拾うて来ては、此小名（コナ）の両境に並べて置く。其一つひとつに、知つた限りの聖衆の姿を、観じて居るのだと聞いた。どれを何仏・何大士と思ひ弁（ワカ）つことの出来るのは、其翁ばかりである」。

山々が連なる奥深い地に突如として出現する「海」という集落。そこでは狂った翁が一人、夜も昼も河原に出て、さまざまな石を拾ってきては、聖なる寺院に飾るかのように、並べ立て積み上げていた。翁はその石の一つ一つに仏を見、たった一人で、自分だけの極楽浄土を創り上げようとしていたのである。折口の古代学において、「翁」は天と地を一つに繋ぐマレビトの典型として存在していた。この一連の短歌は、マレビトによる時間と空間の刷新をも表現したものでもあった。学が確立される以前に、その本質が歌によって表現されていたのである。「海」という集落を旅人として訪れた折口は、月の光が石の仏たちを照らし出す真夜中の河原で、次のような光景を目にする。

うづ波のもなか　穿（ウ）けたり。見る〳〵に　青蓮華（シャウレングエ）のはな　咲き出づらし

「海」という集落の前を滔々と流れる大河のなかに突如として渦が生まれ、流れのなかに穿たれたその中心から、青蓮華の花が咲き出でてくる。「海」という集落も、狂った翁も、ともに実在する場所であり人だった。しかし、手帖に残された旅程を検討する限り、折口がその集落を訪れたのは夜ではなく昼のことである。折口は「夜」の連作で、現実と虚構を、光と闇を、昼と夜を、創作と研究を、一つに結び合わせていたのだ。まさに「超自然主義」を実現した一首の短歌であった。折口は、想像力によって創り上げられた虚構の花から、表現世界というもう一つの現実を生み落としているのである。西脇が言う「外形からみると詩は非現実で非真理であるが、実は現実、真理を認識する」というテーゼを実践するかのように。あるいはマラルメが、「詩の危機」に記した一節を実践するかのように――「私が花！と言う。すると、私の声が、いかなる輪郭をもその中に払拭し去ってしまう忘却の彼方に、我々が日頃狎れ親しんでいる花とは全く別の何かとして、どの花束にも不在の、馥郁たる花のイデーそのものが、音楽的に立ち現れてくる」★8。

折口は短歌に句読点を付し、区切りを入れた。『海やまのあひだ』で試みられた短歌の実験から、新たな「詩」が生み出されてくる。折口は、『海

やまのあひだ』の末尾に付された「追ひ書き」で、自ら実践しつつある短歌の革命について、詳細に述べていた。歌に切れ目を入れることで、歌を詠むにあたっての呼吸や休止といったリズムを示し、歌に内在する「拍子」をあらわにすることが可能になる。それが歌の「生命」を甦らせ、歌の「様式の固定」を「自由な推移」に導き、歌の発生をより自在にする。折口晩年のスサノヲ詩篇が誕生するのは、実にこの地点からなのである。

折口自身の言葉を聞こう——。

> 私は、地震直後のすさみきつた心で、町々を行きながら、滑らか拍子に寄せられない感動を表すものとしての——出来るだけ、歌に近い形を持ちながら——歌の行きつくべきものを考へた。さうして、四句詩形を以てする発想に考へついた。併し其とても、成心を加へ過ぎて、自在を欠いてゐる。私は、かうして、いろ〳〵な休止点を表示してゐる中に、自然に、次の詩形の、短歌から生れて来るのを、易く見出す事が出来相に思うてゐる。

折口の「詩」は関東大震災を契機として生み落された。折口の「次の詩形」を求めての苦闘は、新たな大震災を経たばかりのわれわれにとって、まったく無関係ということはできない。否、それどころか現在参照すべき最も切実な試みでさえある。現実の変貌とともに変革された短歌から生まれ出てくる「次の詩形」。まさにそれこそ、折口がスサノヲ詩篇として実現していったものである。さらに折口は、スサノヲ詩篇を書き進めることと並行して、もしくは、その実験を糧として、「詩語としての日本語」(1950年)、「詩歴一通」(同年)、「俳句と近代詩」(1953年)と続く一連の詩論を書き継いでゆく。折口がそれらで見出した、来たるべき未知なる詩の姿は、逆説的に、西脇の詩がもっていた可能性を浮き彫りにしてくれる。

折口は、「詩語としての日本語」を、小林秀雄によるランボーの「酩酊船」の邦訳、その一節を引用することからはじめている。そして、こう続ける。この援用文は「幸福な美しい引例」である。しかし、「小林秀雄さんの翻訳技術がこれ程に発揮せられてゐながら、それでゐて、原詩の、幻想と現実とが併行し、語(ことば)の翳と暈との相かさなり靡きあふ趣きが、言下に心深く沁み入つて行くと言ふわけにはいかない」と。折口は、日本語によって可能になった近代詩の起源に、異なった言語体系との格闘、ヨーロッパの象徴詩の「翻訳」による導入を見出す。つまり、折口にとって、詩とは、「翻訳」とともに、あるいは「翻訳」によって可能になる言語表現だった。

「詩語としての日本語」にはるかに先だって、雑誌『アララギ』の編集同人になったばかりのまだ青年だった折口自身も、自らが詠み続けてきた短歌、すなわち日本語によって可能となった古代詩の起源に「翻訳」による苦闘を見出していた。「漢字の伝来」に抗いながらも、独自の表現を見出していた古代の人々が残してくれた「古語」。その「古語」を甦らせる

ことによって、滅亡を運命づけられた短歌にも新たな生命が賦与されるはずである。大正６年（1917）に発表された「古語復活論」は、こうはじまっていた――「記紀の死語・万葉の古語を復活させて、其に新なる生命を託しようとする、我々の努力」と。しかし折口は、ただむやみに「古語」を復活させようとしたわけではない。現在使われている日本語の言葉だけでは、どうしてもわれわれのもつ「生命の律動」の全体を表現し尽くすことはできない。だからこそ、現在とは異なった地点から、「全体に鳴り響く生命を持つた」、未知なる詩の言葉を見つけてこなければならない。

「古語復活論」の段階、つまり短歌のみを論じていた段階では、折口にとって詩語の「生命」を拡充してくれるのは「古語」だけであった。しかし、「短歌の次の形」を模索し、新たな「詩形」を見出しつつあった晩年の折口は、さらなる彼方へと一歩を踏み出そうとする。「詩語としての日本語」の段階では、短歌における「古語」を肯定するだけでなく、詩における「未来語」が探究されなければならなかった。短歌における「古語」と詩における「未来語」は通底してくるはずである。「詩語としての日本語」の折口が、「古語」と「未来語」の交点にあらためて見出したのが、「翻訳」によって可能になる未知なる詩の言葉であった。もちろん、その最良の成果ともいえる小林秀雄のランボーの「翻訳」でも達成からはほど遠い。しかし、「翻訳」からしか詩の「未来語」は生み落とされないのだ――「詩の未来文体の模型として、詩人の大変が努力してゐるのが翻訳詩である。原作に対する翻訳者の理会力が、どんな場合にもものを言ふが、その理会が完全に日本語にうつして表現せられた場合は、そこに日本の詩が生れる訣である」。

自らが短歌に採用しようとした生命力をもった「古語」もまた、実は「外国語」のようなものであった――「私らの場合はむしろ外国語に持つ感覚に似たものを、古語に感じてその連接せられた文章の上に、生命を託してゐるのである」、あるいは「言語の異郷趣味を狙つた点に於て、古語も外国語も一つであつた」とも。日本語を条件として詩を書きながら、日本語の彼方へと抜け出していくこと。そこに詩の未来がある。

折口は、「国語に訳された泰西の詩の翻訳文体を学ぶ事」で成長を遂げてきた象徴詩の歴史のなかに、いまだ達成されることのない詩語の未来、詩語が潜在的にもっている可能性の萌芽を見出す。そして折口が、日本の象徴詩の起源に位置すると考え、「古語を活し、古語と近代語・現代語との調和の上に生命ある律的美しさを与えた」と評価する蒲原有明の世界を、このとき、まったく新たな地平に甦らそうとしていた詩人こそ、西脇順三郎に他ならないであろう。西脇の第一詩集『Ambarvalia』は、まさにヨーロッパの「古語と近代語・現代語」から翻訳された詩篇と現代の日本語で書かれた詩篇の融合としてかたちになっていた。第二詩集『旅人かへらず』では、詩の未来語として短歌や俳句の古語が大胆に活用されていた。西脇順三郎の営為は、折口信夫の営為を映し出す鏡として存在していたの

である★[9]。

さらに折口は、そのような未来の詩が到達すべき究極の地点をも描き出す。死の年に発表された「俳句と近代詩」には、次のような一節がある――「たとへば雪――雪が降つてゐる。其を手に握つて、きゅつと握りしめると、水になつて手の股から消えてしまふ。其が短歌の詩らしい点だつたのです」。ただ一瞬だけ、「神」の語が「音楽として人の胸に沁む」とともにゼロへと消滅してしまう詩。折口信夫が最後に見出した短歌の「消滅」、短歌の「無」は、「超自然主義」の帰結として「詩の消滅」を説いた西脇や、「無」の詩法を説いたマラルメとも響き合う。おそらくそこは、近代という時代が可能にした詩的表現が臨界を迎える地点でもある。

註および参考文献

☆1――以下、西脇順三郎の生涯については、新倉俊一『評伝　西脇順三郎』（慶應義塾大学出版会、2004年）を最大限に参照させていただいた。西脇と折口の関わりについてはV、特に「『幻影の人』の成立」に詳しい。

☆2――表題作ともなった「Ambarvalia」は「穀物祭」（収穫祭）を意味し、ラテン詩人が残した詩の抄訳を再構成したものである。また、『Ambarvalia』も『海やまのあひだ』も、時間と空間の境界を自在に超えながらも一つに結び合わせる「旅」によって成立した詩集であり歌集であった。以下、西脇の詩の典拠については、新倉俊一『西脇順三郎全詩引喩集成』（筑摩書房、1982年）に依っている。

☆3――西脇と折口の営為を比較検討した先行研究として、現代詩読本『西脇順三郎』（思潮社、1979年）に発表された武田太郎「西脇順三郎と折口信夫フォークロワの検証」がある。後に詳述する『旅人かへらず』と『死者の書』との比較等、本稿を書く上で大きな示唆を得ている。また猿田彦大神フォーラム年報『あらはれ』第6号（2003年）に掲載された、中西恭子、江川純一、江口飛鳥からなるThe Frazer Projectによる論考「『金枝篇』序説」も、西脇および折口への影響を含め、『金枝篇』を現代に甦らせようとする意欲的な試みである。

☆4――以下、原則として、西脇の詩および著作からの引用は『定本　西脇順三郎詩集』と『定本　西脇順三郎全集』全12巻・別巻1（いずれも筑摩書房）から、折口の詩歌および著作からの引用は『折口信夫全集』全37巻・別巻4（中央公論社、別巻四のみ未刊行）から行っている。ただし月報や対談など、一部初出誌からそのまま行ったものもある。

☆5――引用は『近代悲傷集』の「追ひ書き」より。折口が「短歌の次の形」（「詩歴一通」より）としての詩――折口自身は「長歌」と名づけていた――を書いたのは時代が大きく揺れ動いた、関東大震災の直後、昭和10年前後、そして戦中戦後のことである。時代の激動とともに定型もまた崩れてゆく。旧いものの破壊は、新たなものの創造と見分けがつかない。折口の詩は、そのような両義的な地点に孕まれたのである。

☆6――西脇の主要な折口論として、以下のものがある。「哀悼の言葉」（『三田文学』1953年11月号）、「釈迢空」（『現代詩手帖』臨時増刊、1973年6月）、「日本の民俗学」（『折口信夫全集』月報第2号、1982年）、座談会の参加者として「三田の折口信夫」（『三田評論』1973年10月号）等である。引用はいずれも初出誌より行った。（「釈迢空」のみ河出書房新社より刊行された『文芸続本折口信夫』に再録されたものを利用した）

☆7――西脇が生涯を通じて実践する詩法であり、同時代のライバルと目したエリオットと西脇が共有した詩法でもある。エリオットは「現世と永遠の世

界を連結し、過去と現在、古代と現代、インド文学と英文学仏文学などを連結し、非宗教的なものと宗教的なものを連結し、宗教的清純と道徳的堕落を連結」する。そのエリオットもまた『金枝篇』――正確には、『金枝篇』をもとに聖杯伝説の新たな解釈を提示したジェシー・ウェストンの『祭祀からロマンスへ』――からの大きな刺戟を受け、「荒地」を書き上げた。西脇は、「荒地」を『金枝篇』に描き出されたオシリスの神話から読み解いていく（引用ともに、折口が世を去る前年に刊行された『荒地』邦訳に付された西脇自身による「註解」より）。西脇、折口、エリオットあるいはジョイスを同一のパースペクティヴから論じるため文学史が早急に書かれなければならないであろう。

☆８――慶應義塾大学で西脇順三郎と折口信夫の両者から教えを受けた井筒俊彦が、『意識と本質』（1983年）のなかに訳出した一節から引用した。エリオットによって西脇と折口がつながるだけでなく、マラルメとともに、その輪のなかにさらに井筒を加えることが可能となる。言語学と詩学、あるいは人類学と詩学の交差によって近代の「詩」が生み落とされ、今また新たに未来の「詩」が生み落とされようとしているのだ。

☆９――西脇もまたそれを裏付けるような、自身の詩の世界に向けられた折口の貴重な証言を記録してくれている――折口先生はいつも私に「あなたが外国語を用いられるようにわたしは日本の古い言葉を使いたいのです」と言われた（「哀悼の言葉」より）。「詩語としての日本語」を書き進めていた折口の念頭には、西脇の詩のことがつねにあったはずである。「詩語としての日本語」がまとめられる前年、折口は『旅人かへらず』以降の西脇の詩と詩語の在り方を、こう賞賛していたからだ――「純粋の日本語――さうして同時に日本語の持たない別の表現力――そんなものを持つた語でくり出されて来る」と（「ねくらそふの現実」より）。

（あんどう　れいじ・多摩美術大学美術学部准教授／文芸批評）